

茨城県海外子女教育
国際理解教育研究会
2001年度 広報誌

会 長 あ い さ つ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長 細野 泰也

9月11日は、世界中にショッキングなニュースが駆けめぐった。ニューヨークのマンハッタンの美しいスカイラインを描いてきた双子の超高層ビルが数千人の人々を抱いたまま崩れていく映像は、世界中の人々に正常な頭の中では、想像もできなかった現実に大きな課題を与えた大事件である。

本県からパキスタンのカラチ、イスラマバードの日本人学校へ派遣されていた二人の先生方も現在日本に帰国して、前任校へ勤務し、待機中と聞いている。

私も30数年前、香港日本人学校勤務中に香港暴動に遭遇した。夜間外出禁止令、缶詰爆弾水道の給水制限等、多くの不安の中での生活は、国内では考えられない状況であった。現在世界各国へ派遣されている先生方の気持ちを察すると、心が痛む思いである。しかし、この不安の中の教育実践こそ、それぞれの先生一人一人が今後の教育実践の心の”糧”となることと期待している。

1996年に、ユネスコの「21世紀教育国際委員会」では、「学習に秘められた宝」と名付けた報告書を発表した。その中の第4章に「学習の4本柱」が記述されている。

第1に、理解の手段を獲得するために「知ることを学ぶ」

第2に、自ら置かれた環境の中で創造的に行動するために「為すことを学ぶ」

第3に、社会のすべての営みに参画し協力するために「他者と共に生きることを学ぶ」

第4に、上記の3本の柱から「人間として生きることを学ぶ」である。

特に現実の世界では、多種多様な民族国家、文化や宗教による集団が混在し、相互の間には、緊張関係が冒頭の事件で壊れたことである。そのためにも、これからは平和共存を大きく取り上げるべきと言える。

私たち会員は、それぞれの派遣国に置いて、これらの「4つの柱」を基礎として、海外子女・国際理解教育を実践してきたと信じている。特に、4本の柱のうちの第4の柱を重要視しなければならない。まず、個の発達を自己を知ることから始まり、自己と他者との関係を築き上げるという対話的プロセスである。教育とは、”絶え間ない人間関係のプロセス”であると大声で強調したい。

21世紀の初めに、世界中の人々に投げかけた大事件は、ボーダーレス社会、グローバル社会の中では、一人ひとりの個人の生活であっても、世界中の人、物、情報とのかかわりなくしては、生活が成立しなくなると考えられる。特に、「自立性の確立」、そして、「個性の多様性の理解と尊重」とを、教育の原点としなければいけない。

今年も、帰国された先生方、在外教育施設に派遣されている先生方の貴重な体験の報告及びお便りを集めて、本会の広報誌”SECO”を発行できましたことに感謝申し上げるとともに、会員相互、会員以外の先生方との交流の”場”となり、この広報誌が、茨城教育の財産となって、国際理解教育や今後の海外派遣を希望される先生方を含めて、大いに役立つことを願っている。

本年度帰国された先生方からのお便り

インドで感じたこと

下妻市立東部中学校 飯島康之

茨城県の会員の先生方、お元気ですか。壮行会や歓迎会などいろいろと大変お世話になりました。自分がインドで困難な状況に遭い、くじけそうになったとき、思い出したのは茨城県の先生方のことでした。応援してくれる先生方の存在が、私の心を支えてくれまし

た。本当にありがとうございました。

さて前回の報告では研究・実践が中心だったので、今回はインドでどのように人生観が変わったかについて書きます。

第一に、めったなことでは驚かなくなりました。それはインドでは本当に日本では考えられないようなことが毎日起こるからです。4月に赴任した時は、インドは酷暑（猛暑の上です）の時期で温度計が50℃をさすのを初めて見ました。自分の体温が上昇するのを体感したほどです。そして、暑い年にはインドの現地校は夏休みが半月くらい早く始まってしまふのでした。交流の計画を立てていたのに、もう夏休みに入ったと聞いて慌てたことがあります。臨機応変な社会なのです。また、そんなに暑いのに毎日停電があります。エアコンが使えず、つらかったです。日本とは違うことがたくさんありました。

第二にどんなことをしても生きていけると思えるようになりました。それはインド人の中には、学校に行くことさえできなかったとしても人間的に立派な人がたくさんいたからです。たとえば私の家で働いてくれたハウスキーパー（お手伝いさん）はネパール人で、インドに出稼ぎに来て40年という人でした。その人は子どもの時に家が貧しくて学校に行かせてもらえず、子どもの子守の仕事しながら背中に赤ちゃんをおんぶしつつ、学校の窓の外から黒板を見て字を覚えたそうです。30年以上ニューデリー日本人学校の教員の家族のために誠心誠意働き続けてくれました。

第三に日本は特殊な国だと思ふようになりました。水道の水が飲めることから、安全に買い物や外出できることなど、これらは日本人が努力して作り、保っているすばらしい社会なのだと思ふようになり、改めて考えるようになりました。

これらの経験を生かし、日本の教育現場でがんばりたいと思っています。

シンガポールの特殊教育

茨城県立美浦養護学校 鈴木 隆

シンガポールに赴任中、小学部の一校・クレメンティ校の養護教育部をまかされることとなり、これを機会にシンガポールの特殊教育について調べ、対象とする子どもたちと国内の教育に少しでも役立てばと思ふ三年間の勤務中に調べたことをまとめた。

1 シンガポール日本人学校における特殊教育

(1) 養護教育部の概要

① ～1986年度（昭和61年度） <教育相談部>

シンガポール日本人学校では、重度の障害を持つ児童に対して、受け入れを断っていたが、保護者やPTAYMCAのボランティアの協力を得て、付き添われながらの聴講生という形での通学を許可されていた。

② 1987年度（昭和62年度）～1990年度

対象児がいない、教育相談部の位置づけが不明確、等の理由により、教育相談部がなくなる。

③ 1991年度（平成3年度） <特殊教育部>

障害を持った児童が目立ってきた、等の理由により、「特殊教育部」が設置された。常勤の担当者はいず、専科講師とボランティアによる個別指導が行われた。

④ 1992年度（平成4年度） <教育相談部>

「教育相談部」の名称となる。活動の目標として、・障害児の指導、・情報収集、・学習障害児の指導（日本語教育も含む）が掲げられた。常勤、非常勤の専科講師とボランティアによって、個別指導が行われた。

⑤ 1993年度（平成5年度）

常勤の教育相談専科教員により個別指導が行われた。

⑥ 1994年度（平成6年度）

肢体不自由児、重度児の転入学に伴い、SJSワールドに「チャレンジルーム」が設置された。個別指導に対応する教員数も増えた。統合教育を原則としたカリキュラムを実施し、活動目標を「障害児と健常児が共に育ち合う環境作り」とした。個別指導に加え、年3回の公開授業や障害者理解プログラムの紹介など、

学校全体へ働きかけた。

- ⑦ 1995年度（平成7年度）～1997年度（平成9年度） <養護教育部>
二校分離により、チャンギ校に「プレイルーム」が作られた。教員数が増え、個別指導に多くの時間をあてられるようになった。「心身に障害を持つと思われる児童への対応と、共に育ち合う環境作り～障害児を校内の風景に～」という活動方針により、活動を学校全体のものとして広め、全職員に理解と協力を得られるようにした。この間に名称が「養護教育部」となる。
- ⑧ 1998年度（平成10年度）
完全二校分離独立体制により、クレメンティ・チャンギ両校に養護教育部、チャレンジルームが置かれる。
「チャレンジタイム」を設け、対象児の小集団活動を推進することにより、意欲の改善を図った。
また、養護教育部としての連携・系統性を確立させるため、中学部の養護教育担当教員にも相談し、合同での部会を実施した。さらに、小、中学部三校の養護教育部・養護教育の対象児童、生徒の、一緒に活動する機会を設け（学期一度）「合同チャレンジタイム」と称して、保護者も参加して行われる行事とした。
この年初めて、文部省派遣教員が常勤として養護教育部にあてられた。
- ⑨ 1999年度（平成11年度）
対象児が減り、学校の予算難等の理由により、担当の教員数も削減された。しかし、途中でチャンギ校にボランティアが入ったり、クレメンティに転入生が加わったりと異動があった。チャンギ校にも文部省派遣教員が養護教育部にあてられた。
- ⑩ 2000年度（平成12年度）
再び対象児童が増加し、上層部の理解を得ることができ、担当教員に文部省派遣教員2名（共に男子）現地採用職員常勤1名、非常勤1名の4人体制をとることができた。自分（鈴木）にとっては任期最後の年度であったが、校務主任を命ぜられ担当を外れた。

(2) シンガポールの特殊教育

ここに、赴任3年の間に見た、シンガポールの特殊教育事情について述べて見たい。周知のように、この国は、義務教育に関する法律が昨年<2000年>ようやく成立し、実施は2003年からという段階であるが、国民の教育熱は華人系シンガポーリアンを中心に非常に高く、小学4年生と6年生時に選別のための試験があるという、新しく総合的な教育を取り入れ、各教科内容を削減し自由な教育に進む日本とは対称に、まさに優性主義的な教育思潮のさかんな国であるともいえる。

① 特殊教育の学校

シンガポールの現地校には、それぞれ特殊学級の形で特別に課業を行うクラスが存在するが、そこは日本で行っているものとは若干異なり、学業遅滞児やごく軽度の知的障害の者に対して教育活動をしているらしい。私がそれに気づいたのは、地元の小学校の現地教員（シンガポーリアン）が、日本人学校の訪問に来校した際、日本人学校の特殊学級（固定制でなく取り出しと付き添いの形式であったが教室は確保されていた）を参観、やはり現地校でも特殊学級を担当しているという先生が来られたので、障害児童についての話を交換し合うつもりで、丁度室内にいたダウン児と自閉症児について説明をすると、その先生は、「このような子どもはシンガポールでは普通の学校には入れない」「私の受け持っているのは学習の遅れた子どもたちだ」ということを話してくれた。

そこで、目を開かれた思いで調べてみると、やはり日本とは異なり障害を持つ子どもは普通学校には入らず、特別の学校に行くらしいということが分かってきた。そこは、主に民間機関によって運営され、シンガポールの教育省が財政援助と教員の配置を行っているという。

学校名を列挙してみると、

AWWA Special School, AESN Delta Senior School, AESN Chao Yang Special School, AESN Jervois Special School, AESN Katong Special School, Association for the Deaf

Vocational School for the Handicapped, Canossian School for Hearing Impaired, MINDS

Guillemard Gardens School, MINDS Jurong Gardens School, MINDS Lee Kong Chian Gardens School, MINDS Towner Gardens School, MINDS Yio Chu Kang Gardens School, Prison Education Branch, RainbowCentre Balestier Special School, Rainbow Centre Margaret Drive Special School, Singapore School for the Deaf, Singapore School for Visually Handicapped, Spastic Children's Association School 等 18校のスペシャルスクールが存在する。

② 知的障害児の教育

知的障害を持つ児童は、ESN（教育的低水準：IQ50~70）とMINDS（中度遅滞：IQ35~50）に分けられる。これらの子どもたちは、それぞれの実態に合わせて、言語、数量、自立、社会生活技能等のプログラムが与えられる。

軽度の知的障害児は、AESN（シンガポール教育低水準協会）という民間組織が、現在4校の養護学校を持って6才~16才までの子どもたちが通学している。16才になると就学前の指導を受けて就職するようになる。

MINDSという大きな団体も、知的障害に関する教育を推進している。1999年現在で5校の養護学校を持ち、その他福祉作業所や入所施設も持っている。養護学校には、3才~18才までの知的障害児が通学し、18才以上は福祉作業所に通う。MINDSの養護学校のカリキュラムは、言語、読み、書き、話す、計算等の技能の他、音楽、図工、体育等の教科から構成され、買物学習や公共交通機関の利用、工場見学など、日本の養護学校と同じ様な学習も行い、福祉作業所とも連携して社会生活への適応を高める教育を行っている。

(3) まとめ・雑感

来星当初、シンガポール国内の地理状況を詳しく知るため、地図を片手に公共交通機関（バス、MRT）を利用して歩き回った。

その結果、レストランやファーストフード店等の飲食店を始めとして、比較的障害者雇用がなされていることに気づいた。

スーパーマーケットのレジで買い物袋に品物を詰める人や、手提げかごを並べたり荷物を運ぶ役割をもつ人、また、飲食店内では、食事を済ませたテーブルの片づけ等の軽作業を黙々とこなしている、様々な障害を持つ人たちの姿が見られ、日本の現状に比べてかなり就労への道が開かれているように感じられた。周囲の人々の障害者への接し方も日本とはまた違う。これは赴任地であったシンガポールだけでなく、周辺の国でも同じ様に暖かく親切な気配りを障害者に対して持っていた。旅行先のホバートの空港で車椅子に乗った老婆を見かけたが、付き添いの者が空港の係員に車椅子ごと預け、係員は慣れた様子で滑走路に入り、そのまま専用のリフトに同乗して機内に収まる様子が見られた。もし日本であれば、あの様な方の航空機利用は付き添いを必ず要請され、本人も出づらいことであろう。地方の一空港でも、障害者が一人で旅行できる設備とその体制が整っていることであらためて感じさせられた。

省みて日本を思う時に、民族性や風土・環境の違いもさることながら、いつの日にか障害者と一般の人たちが分け隔てなく互いに思いやりをもって暮らせる時代が来ることを信じ、努力を続けて行かねばならないと考えた。ここ南国のシンガポールは既に発展途上国ではなく、ある面では日本をも凌ぐ発達を見せている。これだけアジアで発達した国が、特殊教育という国の負の面でも積極的に活動し、成果を揚げている点を学び、日本国内においても必ず達成できるであろうという希望と自信を育てることが出来たのである。

(4) おわりに

暑い夏の日が続くシンガポールで、障害を持つ子どもたちもやはり日本と同じ様に遊び、学び、学習していた。ただ、周囲の人々の暮らし方から来る気持ち、環境等でかなり日本とは異なる生活を送っていることも事実であった。その暮らしは彼らにとっても我々にとっても、日本国内のそれよりは、はるかに過ごしやすいものであったといえる。

また、シンガポール国内にある各国の国際校（インター校）では、特殊教育を必要とする子に対する保障が後期中等教育段階までであるのに対し、日本の在外教育施設は、後期中等教育段階の特殊教育を保障していないという事実があった。企業の活発な活動が展開され

るここシンガポールは、日本人子弟の数も多い。当然、特殊教育を必要とする子どもたちもまた多い。他の国々は在外の教育施設に関しても国内と同じ様な教育を保障しようとしているのに対し、日本の在外教育施設は今だに民間ベースの苦しい状況である。国を挙げた対策が在外教育に関してもますます必要であるとの認識を強めた三年間であった。

<参考文献>

「在外教育施設における特殊教育の現状と後期中等教育の方向性について」

那須野三津子（2000/3/15）筑波大学修士論文のまとめ

「発達の遅れと教育—40カ国と日本の比較」日本文化科学社

「DIRECTORY OF SCHOOLS—EDUCATIONAL INSTITUTIONS 1999」

MINISTRY of EDUCATION

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌への原稿

水戸市立五軒小学校（元 北京日本人学校）増田浩一

歴史の都（現在の北京）

世界第4位の面積、世界第1位の人口を誇る中華人民共和国。その首都北京は元の時代から700年以上も都として栄えてきました。1999年の建国50周年を機に町並みは一新し、空港の新築、地下鉄の延長、環状道路の建設などを行いました。また2008年のオリンピックの開催が決定したことから、国際都市としてさらなる発展を遂げていました。昔からの落ち着いたたたずまいの歴史を感じさせる場所と近代的な発展を見せる場所とが共存している町でした。

学校自慢

○現地校との交流が盛んでした。例えば近くの高家園小とは各学年で発表会をしあったり、特に日本語を学習している月壇中学校とは弁論大会をしたり、さらには地方の希望工程の学校には文房具などを寄付したりなどをしてきました。また北京にあるフランス人学校・ロシア人学校・ドイツ人学校・インターナショナル学校ともスポーツの交流をたくさんしました。

○校外学習が盛んでした。全校遠足では万里の長城や香山公園、各学年では北京動物園、様々な博物館、飛行場、浄水場、消防署、ごみ処理場、北京西駅、蘆溝橋、焦庄戸戦場跡地、ソニークスプレーションなどを積極的に見学に行きました。

○新しい取り組みが可能でした。中国語や英語の学習ができるのはもちろん、小学校の低学年ではイマージョン教育（外国語で授業を行う）にも取り組みました。

感想

様々な国の学校と交流し、見学する機会に恵まれました。どの学校も教育の大切さを十分感じていたものの、これがベストということではなく、悩みながら指導しているのが現状でした。今まさに教育の現場で感じるのは、この先学校を、教育をどうやってすすめていくのか、また行きたいのか長期的なビジョンが必要なのではないかと感じました。

日本の子ども達が世界で活躍できるようにするためには、義務教育期間には最低限の基礎学力と常識（集団行動のやくそく）を身につけさせなくてはならないと思いました。

在外教育施設に派遣されている先生方からのご便り

ふきとばせ暑さを！
第20回コタキナバル日本人会運動会

コタ・キナバル日本人学校長
小出 治夫

2001年7月1日、「ふきとばせ暑さをみんなのパワーで 第20回コタキナバル日本人会運動会」のスローガンが風船につながれてはためいている。

前日に降った雨が嘘のように晴れあがったコタキナバル、突き刺すような南国の太陽の下で恒例の運動会が始まった。本年は第20回ということで主催の日本人会行事委員の皆さんも早くから計画に取り組み、いつもの年になく張り切っていた。

コタキナバル日本人学校は昭和58年4月に開校し、補習校時代を加えると今年で20回目

の運動会を迎えることになる。40名近く在籍していた児童生徒も現在は主力産業(木材)の停滞と共にここ数年減少傾向である。毎年行われる運動会の主催は日本人会であるが、当然児童生徒も参加するので学校がリーダーシップをとって計画、立案することが多くなる。今年は赴任したばかりの体育主任を中心に男教員全員のパワーを出しきり、チームワークのとれた運動会を成し遂げることができた。

行進曲のファンファーレが鳴り出した。紅白2チームに分かれた日本人学校の児童生徒を先頭に、それに続いて日本人会員、地元の学校(スリメンガシスクール)、そしてマレーシア・サバ大学生の入場行進が始まった。小学1年生のかわいらしい宣誓とともに運動会はいよいよ開始。地元の人たちを加えた国際色豊かな催し物の始まりである。本校は国際理解教育を積極的に推進しているが、とすると一過性の活動で終わってしまうことの反省から、可能な限り多くの活動に地元の方や外国の方に参加を呼びかけている。

「よいしょ よいしょ」運動会会場の中華学校のグラウンドいっぱい汗が飛び散った。旗を振る応援団の有志夫人もおのずと力が入る。全員の力を1つに集める綱引きが始まった。綱引きはここマレーシアでは珍しい競技であり、初めて参加した地元の生徒も興奮した顔が漲っていた。紅白のチームの団結が次第に高まってきた。

続いて行われた紅白玉入れ競技、澄み切った青空に紅白の玉が花火のように飛び交う。大人も子どもも、参加した外国人も籠をめぐけてナイスシュート。どっちが多く入ったか玉を数える時はどちらのチームもつい大きな声が出る。結果は白組が万歳。赤組は拍手を送って競技を閉じる。

いよいよ日本人学校児童生徒の恒例の出し物がやってきた。ここ数年新任の派遣教員が日本全国の踊り持ち寄り、子ども達に指導したものを運動会で披露することが恒例となっている。今年はNHK連続テレビ小説「ちゅらさん」に因んで沖縄の踊り「エイサー」に挑戦した。小学1年生から中学生までの全員で踊る晴れの舞台である。小太鼓を持って飛び跳ねる小学1年生の姿に一段と拍手が大きくなる。演技終了後全員で撮った記念撮影では沖縄の民族衣装をまとった子ども達が自慢げな顔で笑顔いっぱいであった。

そしていよいよ最後のプログラムを迎えた。「アチャカ ブッチャカ」じゃんけんで負けた人が勝った人の後ろに続き、どんどんその輪が大きくなっていく。全員が一つの大きな輪になった時、いよいよ総領事夫人の登場。「指指、肩肩、腰腰」軽快なリズムに乗って全員の心と体が1つになる。総領事夫人のリードで「アチャカ ブッチャカ」大人も童心にかえり踊りだす。最後に全員の心が1つになったところで、終わりの会を兼ねながら世界平和を願って"IT'S A SMALL WORLD"を歌って閉会となった。

年に1度の運動会は海外在留邦人が一同に会し、汗を流す絶好の行事である。さながら昔ながらの田舎の運動会といったところである。国籍を超え、小さな平和な集いがここコタキナバルで今年も引き継ぐことができ、日本人学校に勤務するものとしてまた1つ成就感を味わうことができた。



ローマ日本人学校 平成13年度派遣 村上 雅美

「プラタナスの並木に続く古い石畳 歩きながら語り合ったよ 遥かな昔を…」児童、生徒の奏でるすてきな校歌で迎えられたのがついこの間のことのように。

たくさんの緑や花々に囲まれ、暖かい雰囲気のためようローマ日本人学校。朝から、丁寧に水やりをしている児童・生徒の姿がみられます。また校内には、スリーナ、びわ、なし、ぶどうなどの樹木もあります。木登りをし、昼食後のデザートとして季節折々の実をおいしそうにほおぼる姿が…。

ローマ日本人学校では、教科の枠を越えた体験的・問題解決的な学習を小学校低・小学校高・中学校の3ブロックにわけて実施しています。私が担当の小学校高学年ブロックのテーマは、「アモーレローマ」です。文字通り「ローマを愛そう」です。1学期はイタリア語会話の学習、

そこで学んだイタリア語を活用してのメルカートでの買い物実践、交流をしている小学校の幼稚園部への訪問、地域の消防署見学などを行いました。「チャオ」「ボンジョルノ」と元気に挨拶を交わし、一生懸命に自分のいいたいことを伝えようとしている児童の姿勢には感心させられました。

1学期中には、小・中合同のたくさんの行事も行われました。6月の写生会の会場は、なんとフォロ・ロマーノ。画用紙いっぱいのにびのびと描かれた児童のコロッセオの絵を見て「いくらですか。」と問いかける観光客も。児童・生徒のアイデアを生かした手作りの運動会も感動的でした。そして、ローマ郊外のアブルツォで7月に行われた3泊4日の宿泊学習。毎日毎日が体力勝負でした。乗馬、カヌー、ボート、オリエンテーリング、アーチェリー、木登り、野外炊飯…盛りだくさんの活動を児童らに負けまいと必死にこなしていきました。流れる川の透明なこと、鮮やかな緑に彩られた山々が綺麗だったこと…田舎っ子でも都会っ子でもない児童・生徒にとっては、すべてが新鮮に映ったようでした。

今学期は、転校生を見送る機会も何度かありましたが、ローマ日本人学校を去る児童・生徒の多くが心からこの学校を愛していたということ色々の場面で感じさせられ、感慨深いものがありました。「アモーレイタリア」、「アモーレScuola Giappone di Roma」…私はこの国、この町、この学校が日を追うごとに、月を追うごとに好きになってきました。

「フォロロマーノでの写生会の様子」

「宿泊学習 最終日の山登りの様子」



シンガポール日本人小学校 徳永美保

本年度、私は2年生を担当しており、総合の学習で、先日近所のマーケットとホーカー、中国寺院の見学に行きまして。子供たちは、三重県のある学校と日本の様子とシンガポールの様子の情報交換をしているため「日本の友達に、シンガポールらしい様子を探して知らせてあげよう。」と張り切って探検に行きまして。この見学のちょうど1週間前に、ローカル校との学校交流があり、子供たちは満足して活動を終え、また、英語やジェスチャーを用いて気持ちを通じ合わせることができました。この体験が自信となり、子供たちはやる気まんまんでマーケットなどに飛び出していきました。マーケットでも、忙しい時間を過ぎてちょうどほっとしている時だったこともあり、マーケットのおじさんやおばさんは子供たちの活動に協力してくれたり、からかってくれたり(?)・・・。百聞は一見に如かず・・・と言うことで何枚か映像を送らせていただきます。



アザーンの響き，スパイスの香り漂う計画都市イスラマバード

平成13年度派遣教員 イスラマバード日本人学校 野上郁男

ここパキスタンは、まだ建国50年ほどの新しい国家である。しかし、この国を南北に流れる雄大なインダス川は、モヘンジョダロに代表される世界4大文明のひとつ「インダス文明」が栄えたところであり、この地の歴史は、世界的にとっても古いものである。また「ガンダーラ」と呼ばれる仏教国家の歴史も、この国の歴史の一部である。このように世界的にも有数の歴史遺産を持つ国であり、実際にそれらの遺跡も多く残されている。またこの国の北部は、山岳地帯で、ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈がぶつかり合い、世界第2位の高峰K2を代表とする7000～8000メートル級の山々が連なり、その雄大かつ美しい自然風景は、世界に誇れるものである。

では人々の生活はどうか。この国の建国の理念が、イスラム教によるものであり、国民のほとんど（約97%といわれている）がイスラム教徒であることから、当然、そのイスラム教の様々な習慣が大きく影響している。街中にみられるモスク、1日5回のアザーン（日本ではよくコーランといわれている。）の響き、そしてお祈り。食べ物も、アルコールは禁止、豚肉はいっさい食べないなど、日本でもよく知られた習慣が生きている。それにインドと同様、スパイスの利いたカレー料理が主に食されている。また女性のほとんどが、シャルワール・カミーズと呼ばれる民族服に身を包み、頭をドゥパッターと呼ばれる布で覆ったり、目の部分しか肌が見えないブルカを着ている。男性の多くもシャルワール・カミーズを着ている。

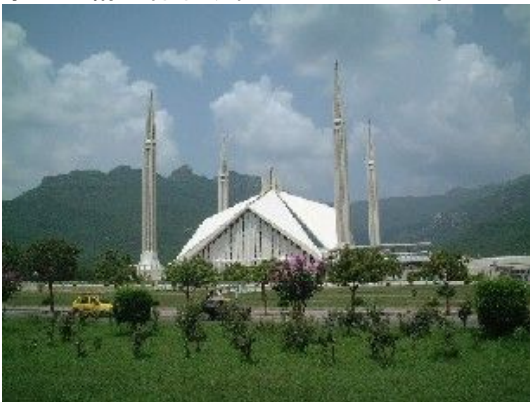
次に私たち家族が住む首都イスラマバードについてであるが、この街は、建国後建設された計画都市であり、街の様子はこの国の他の地域と大きく違っている。街並みは基盤の目のように区画され、官公庁や大使館、公園、マーケット、住宅街などが計画的に配置されている。道路はまっすぐに伸び、その周りには街路樹が植えられた、緑あふれる近代的な街である。

しかし首都であるこの都市でさえ、この国の経済情勢のきびしさを反映してか、街中に

は物乞いをする人も見かける。ひとたび雨がふると、道路は水浸し。突然の停電。時期によっては、水不足による断水など、当然のように起こる。日本で日頃食べてきた食物もそう簡単に手にはいるわけではない。また治安的にも、すべてが平和で安全というわけにはいかず、いつ何が起こるかわからない。そのため家には24時間体制で警備員を雇っているし、どこでも気軽に1人で歩けるかという、?である。実際に私が赴任してからの4ヶ月間に、イスラマバード近郊でも何度か爆破事件があり、死傷者も出ている。日本人学校の前にはいつも数人の警備員がたっており、通学バスにも、常時2人の警備員が同乗している。等々日本とはずいぶん異なっているのは事実であり、比べものにならないぐらい不便であることには間違いない。毎日の生活の中で、安全か危険かといったことを意識することも、はるかに多い。

以上がパキスタン及びイスラマバードの様子である。では私たちの生活はというと、ここまでを読まれた方は、この生活はさぞ大変だろうと思われたかも知れないが、不思議なもので、非常に過ごしやすい。少なくとも私にとっては。なぜなのか。もしかすると、この国では、時間がゆっくりと、穏やかに流れているのかも知れない。時計の針の動くスピードは日本と同じでも、時間の流れ方は違うような気がする。こちらの人々が、おおらかで時間に追われた生活をしていない（ように見える）からなのだろうか。それとも、未だに残る階級社会の中であっても、苦しみを苦しみとせず、何か自分の人生の楽しみを見つけ、優雅に生きている（ように見える）からであろうか。とにかく時間がゆっくりと流れ、人それぞれが自分の生きる道を焦ることなく一歩一歩生きている（ように感じる）のは事実である。今日がダメなら明日がある。かといって明日は何が起こるかわからない。「インシャアッラー」である。それでも人は十分生きていけるのである。そしてこの国の人々は、そんな生き方をごく自然にやってのけてしまっている（ように思う）。

イスラマバード日本人学校で勤務する間、こちらの生活を大いに楽しみ、勤務校での仕事にも精一杯取り組んでいきたい。



ファイサルモスク2



国会議事堂を臨む2



ラコルム山脈2



カ
サンデーマーケット香辛料with Nogami

シドニー日本人学校の特徴

シドニー日本人学校 教諭 坂入 徹

本校は、日本の義務教育課程と同等の教育を行う在外教育施設として、文部科学省から認定された学校であると同時に、NSW州教育省の認可を受けた私立学校でもあります。

最大の特徴は、小学部に主としてオーストラリアの子ども達を受け入れる国際学級を併設していることです。日本人学級では、文部省の学習指導要領に則った教育を行い、国際学級では、現地NSW州の教育課程に基づく教育を行っています。これらの特徴を活かすべく、日英両語の学習をはじめ、音楽、図工、体育におけるミックスレッスン（合同授業）の実施、各教科での合同授業、学校行事の合同実施、交歓ホームステイプログラム等、あらゆる教育活動において日豪児童・生徒による交流学习の場を設けています。

☆ミックスレッスン（体育）の実践

小学部体育の授業では、週2. 5時間全て日本人学級と国際学級の2クラス合同で、日本人学級担任と体育専科教員または、日本人学級担任と国際学級担任の2名によるチームティーチング方式で実施しています。指導内容は、日本の教材に加え現地教材のタッチラグビー、クリケット、ブッシュダンスなどを取り入れております。

授業中は、日英両語が飛び交い、日本人学級、国際学級の区別なく一緒に活動しています。片言の言葉でコミュニケーションし、互いに協力して活動する子どもたちの様子には、頼もしささえ感じられます。

派遣教員にとっては、日本人学校勤務でありながら、授業での指示に英語が必要となるばかりではなく、当然国際学級担任との打ち合わせや連絡等も英語で行う必要が出てきます。各自家庭教師をつけたり、ESLコースに通ったりと努力をしますが、この点が一番苦勞させられる点かもしれません。

その他にも、日豪の指導法やルールの違い（例えば後転は首を痛めるため豪州では指導しない）や訴訟社会であることなど海外ならではの苦勞もありますが、毎日が教員として貴重な研修の機会であり大変勉強になります。今後も、本校で学んだ子どもたちが将来日豪の架け橋となり、また世界の人々と協力し、共に活躍できる人物に育ってくれることを願いながら、研究実践を続けていきたいと考えております。

シドニー日本人学校ホームページ www.sjs.nsw.edu.au



クリケット1



クリケット2

「あたためて思うエジプト」

在エジプト国カイロ日本人学校
教諭 浅野光省

エジプト生活3年目・・・長いのか短いのか、はっきりとした答えは見つからないのですが、その中で変わりゆくエジプトを生活しながら、肌で感じながら、自分の目で見てきました。まずは、車・・・5つ星のホテルに横付けされるでこぼこの古いタクシーのアンバランスさに戸惑いながらすぐにうるさいくらいに鳴らしまくるクラクションの音。そして、サイドミラーがはずれていたり、バックランプがわれてて方向指示器が効かない状態のまま手信号で道路を曲がろうとする車。さらには、歩行者を押しつけてまで目へ進もう

とする車など、マナーのないエジプシャンが3年前はたくさんいました。今年走っている車は、マナーは変わらないのですがきれいにカラーリングされた新車のような車が増えました。次に、生活用品・・・カイロに来たときは、スーパーマーケットはあるものの、ものはすぐになくなり、いつはいるかわからない事が良くありました。ですから、カイロではこんな言葉も流行ったくらいです。「欲しいと思ったときに買わないと・・・ある時に買わないと・・・」でも今は、ものが抱負に揃ってきたため、そんな心配もいらなくなりました。スーパーに並ぶ品物は以前と比べると遙かに充実してきていることは確かです。ということは、エジプトの生活水準がある程度向上してきているという証拠なのかもしれません。このことは、一口に便利になったと言えるのですが、一方では貧困の差を一層広げてきているという事実もあることは知って置かねばなりません。最後は携帯電話・・・道路を歩く若者のほとんどが、歩きながら何やらしゃべっています。車を運転している人も耳に電話を当てながらハンドルを握っています。ファーストフードの店の中で食べながら話す二人は、それぞれ携帯電話で話しています。携帯電話の使い方は多種多様にあると思いますが、私が来たときにはさほど普及していなかった携帯電話も今では、当たり前のように若い子たちが持ち歩いています。この普及力はどこから来るのでしょうか。

文面の構成上これしかあげることができませんでしたが、暗殺されたサダト大統領の映画が大ヒットするなどエジプトは本当に変わりつつあります。その中で変わらないものがあります。それは、乾いた暑い気候とピラミッドを含めたエジプトの悠久の歴史です。毎日、そのピラミッドを見ながら変わらぬものと変わりゆくものを探して、あらためて思うエジプトの話でした。

クイーンズランド補習授業校の紹介

梶田 悦朗

オーストラリアにはいくつかの補習授業校がありますが、クイーンズランド補習授業校は唯一政府派遣教員のいる学校です。また、クイーンズランド補習授業校の大きな特徴の一つは、2つの学校を有しているということです。ブリスベン校とゴールドコースト校がその2校です。それぞれの学校はブリスベン日本人会とゴールドコースト日本人会が運営母体となっています。幼稚園児（ゴールドコーストのみ）から中学3年生まで受け入れています。8月1日現在で児童生徒数は251名（ブリスベン102名、ゴールドコースト149名）になりました。ブリスベン校はインドロピリー州立高校の校舎を、ゴールドコースト校はオールセインツアングリカンスクールという私立学校の小学部の校舎を借用し毎週土曜日に授業を行っています。

クイーンズランド補習授業校の1日の生活を紹介します。現地採用の教員たちは8時20分頃出勤してきます。主任として任命されている先生は使用教室の鍵開けをします。子供たちは8時40分頃から親に車で送られぞくぞくと登校してきます。8時50分から全校朝会。校長の話と高学年の生徒のスピーチが主な内容です。学校行事として子どもの日集会・七夕集会・お正月集会等もこの時間に行われます。9時10分から1校時の国語の授業が始まり、12時20分まで40分授業を4コマ行います。国語が2時間、算数・数学が2時間です。2校時と3校時の間の休み時間は子供たちの最も楽しみにしている時間です。永住の子供たちが近年増加傾向にあり、遊んでいる時の言葉は英語がよく聞かれます。英語が母語となっている子供にとっては、日本語の教科書を使つての授業はかなり抵抗があります。カリキュラムの編成を工夫していかなければならないと考えています。授業が終わると教室を朝来た時と同じ状態に戻し下校となります。午後1時までが現採教員との契約時間なので、子供たちの下校後のわずかな時間で授業の反省会や研修等を行わなければなりません。

9月1日に迫ってきた運動会を前にこの原稿を書いています。3月18日に当地にやってきて5ヶ月が過ぎました。課題が満載の補習授業校ですが、運営委員の方々と協力しながら、将来オーストラリアと日本の架け橋となる子供たちのために精一杯力を尽くしたいと思います。



ゴールドコースト校の借用校舎



授業風景

ウィーン日本人学校からの報告

ウィーン日本人学校長 会川 忠雄

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会の皆様、お元気で日本の猛暑を乗り切っておられることと思います。日本の情報を得るために視聴しているJSTV（日本語のテレビ局）では、日本の猛暑が大変な状況であることを伝えております。

ウィーン日本人学校のあるオーストリア・ウィーンでも30度を超える暑さですが、湿気がありませんし日陰に入ればとても涼しく、比較的過ごしやすい毎日です。ウィーンの緯度が稚内のずっと北、樺太の中央部あたりと同じですので、涼しいのが当然と言えるかもしれません。

さて、本校の悩みは、児童生徒数の減少です。本日、8月20日の在籍が50名で、昨年度に比べて10人近く少なくなりました。この最大の原因は、日本経済の冷え込みです。企業の撤退、縮小、他の欧州地区支店との統合などによるリストラで、入学してくる子供達が少なくなっているのです。ピンチはチャンスと言いますが、学校経営はピンチでも、今、在籍している子供達にとっては、きめ細かい個別指導が受けられるので、絶好のチャンスと言えるでしょう。

ここで、中学部の生徒の体験学習を紹介したいと思います。昨年9月、ウィーンから北へ車で約1時間、プルカウ村に向かいました。ハウプトシューレ・プルカウ（プルカウ中学校）と本校は、20年以上も交流を続けていて、お互いにホームステイで生徒を受け入れています。今回の体験学習は2泊3日で、参加は、中学部の14名（全員）です。ハウプトシューレに到着するとすぐに、剣道や書道、音楽の合同授業などの交流行事に取り組みました。私も色紙や半紙に名前などを漢字で書いてさしあげ、喜ばれました。

午後からは、いくつかのワイン農家に引き取られていき、それぞれの畑でブドウ摘みをさせていただきました。あまり知られてはいませんが、オーストリアは、とてもおいしいワインの産地なのです。実は、近年、この村でのブドウ摘みは機械化され、手摘みはほとんどしていないのだそうですが、本校生のためにと、一部を摘み取らずに残しておいてくださったということで、感謝しながらハサミで一房ずつ丁寧に収穫しました。

私も一緒になって作業をしました。時々、完熟したブドウをほうばりながら作業を進めます。甘くてフルーティな、とにかくおいしいブドウなのです。時折、ブドウの枝を支える柱と柱をつないでいる針金の上を、小さなネズミが走り抜けます。おいしいブドウを食べているせいでしょうか、銀色に輝く毛並みです。怖がる様子もなく手元を通り過ぎていきます。しばし手を休めて歓声を上げるのは、子供達です。

夜は、ホイリゲという酒場で、ホームステイ先の家族を招待してゲームや懇談など、楽しいひとときを過ごしました。中でも、豆粒を箸でリレーするゲームは大変な人気で、使った塗り箸は全て記念品として差し上げてきました。時期が来て、帰国してもきっと忘れ得ない思い出として残ることでしょう。

さて、話題は変わりますが、本校には体験入学（短期留学）制度があります。小学1年生から中3まで受け入れています。期間は1日以上60授業日以内です。ただし、日本で通学している学校の校長先生の許可が必要です。本校に通学している間、出席扱いにいただけることという条件をクリアする必要があります。

この体験入学制度は、とても好評で、多くの子供達に利用されています。例えば、お母様と小学生で、ウィーンの滞在型ホテルを利用して宿泊（自炊で格安です。）、小学生は本校に通い、お母様は公民館の語学教室（英会話、ドイツ語会話、その他）やマーレライ（絵）などのカルチャー講座に参加するということができます。

本校のカリキュラムや授業料等詳細は、ホームページをご覧ください。音楽と芸術の都ウィーンならではの貴重な体験ができることでしょうか。通学にはスクールバスも利用できますので安全です。ますますグローバル化される時代の中で、小中学生の間にこのような体験を積んでおくことは、意義のあることではないでしょうか。少しPRじみてしまいましたが、本校の開かれた学校づくりの一端を紹介させていただきました。

夏休みも終わり、実りの秋を迎えようとしています。本校でも、校内授業研究会、チロル研修旅行・学芸会・写生会などが予定されています。諸先生方には、超多忙な毎日となることでしょうか。ご健康には十分留意され、お過ごし下さいませ。



ブドウを摘み取る中学生たち



ホイリゲでの親睦会

テヘランより

テヘラン日本人学校 小林 信行

○テヘラン日本人学校紹介

テヘランは、イランの首都、人口は、一千万人を越える大都市です。北には、4000m級のアルボルズ山脈が見えます。テヘランはそのすそ野に広がるオアシス都市です。日本人学校は、1500mの高地に位置し、赴任当初は、息苦しさを感じました。ご存じの通り、イランはイスラム国家のためイスラムの戒律に外国人も縛られます。自由な日本から来た私たちには、最初とまどいがありました。また、イランは「暑い」「砂漠」とイメージしている人も多いのですが、四季もあり、雪も降ります。

学校は、全校生徒20名の小さい学校です。現地理解のため、世界遺産のペルセポリスや「イランの真珠」と讃えられるイスファハン、世界最大の湖カスピ海へと宿泊学習を行ったり、テヘラン近郊の社会見学を積極的に実施しています。今年は、「交流」「学校を開く」をキーワードに韓国学校との交流や日本人会に向けて授業公開をしています。

○心強い茨城県出身の現地スタッフ

この学校には、ここに20年以上勤務し、子ども、教師双方からの尊敬と信頼を集めている現地日本人講師兼事務担当のT先生（女性）がいます。なんと茨城県出身です。茨城出身の私としてはなんと心強い限りです。主にペルシャ語、家庭科の授業を担当し、さらに学校事務、そしてイラン人（政府関係・民間）との交渉等を行ってきまして行っています。

先生方の家族もT先生に支えられています。私も娘が赴任2ヶ月目に真夜中に高熱を発し、どうしていいかわからなくなった時、T先生に電話をしました。病院にも来て頂き医師との通訳、検査の付き添い等を親身になってしてくれました。もう、時計は午前4時だというのに。そのおかげで娘も3日間の入院後、無事回復しました。さらにT先生と話すといろんな事情やイスラム革命後の日本人学校の変遷がよく理解できます。T先生には、「この人なくしてはテヘラン日本人学校は成り立たない」この言葉がぴったりだと思います。遠いイランで茨城出身の先輩が学校を支えているのを見ると、勇気と希望が湧いてきます。



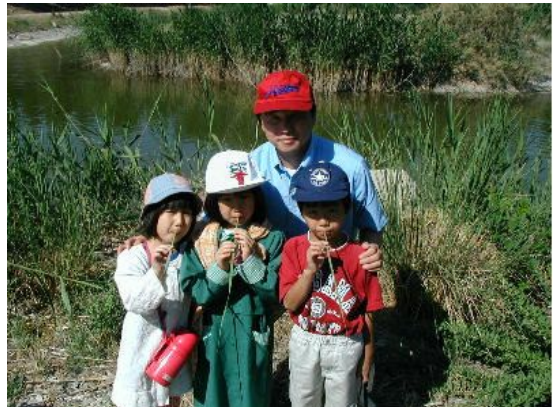
(1) 水パイプにチャレンジ



(2) イランの最高峰ダマバンド5600m



3) イラン人家庭に訪問



(4) 草笛を吹く2年生(植物園遠足)

感動！発見！実感！ 太陽の恵み

～ 台中日本人学校 小学部2学年 生活科「野菜や果物を育てよう！」より～

台中日本人学校 北見 裕

台中日本人学校に4月に赴任した、北見です。今回は、南国台湾で行った生活科の授業でのエピソードを紹介したいと思います。

「今度の生活科は『野菜や果物を育てよう！』という内容をやります。いろいろな野菜や果物の種や苗を持ってきて下さい。」そう連絡してはじまった小学部2年生の生活科、南国台湾でどんな野菜や果物が集まるのだろうか・・・？と正直言って不安でした。案の定(いやいや、期待どおり!)、マンゴー・ライチ・パパイヤ等さすが南国といった果物や、スイカ・メロン・トウモロコシ・イチゴ・キャベツ・ブロッコリー・大根・茄子・トマト・・・etc、本当にいろいろな野菜や果物の種(苗)が集まりました。

さあ、いよいよ種蒔き(苗植え)の日です。兼業農家の次男坊として生まれ育った私の血が騒ぎだします。偉そうに講釈を述べたにもかかわらず、「先生!全部蒔いちゃった!」「どこに何を植えたっけ?」「穴に3個ずつ入れちゃった!」「余ったのも、植えていい?」とさまざまな反応が返ってきました。大騒ぎの末に、種蒔き(苗植え)も終わり、「たっぷりお水をあげて下さい!」と私が言いかけた時にはもう、プランターにはあふれるほど水が入っていました・・・。

次の週の月曜日、種を蒔いてからまだ3日目の朝、「先生!もう芽が出ているよ!!」という子どもたちの声がありました。「何を言っているの、まだ3日しかたっていないのに。」と心の中で思いながらプランターを見に行くと、「エッ!本当に芽が・・・」思わず叫んでしまいました。この驚異の発芽スピードは、まさに台湾の太陽の恵なのでしょう。

それから毎週各自が『観察記録』をつけています。「葉っぱが何枚になったよ!」「まだ、芽が出ないよ!」「しおれちゃったよ!」「大きくなって倒れそうだけど・・・。」「ひげみたいなのがでてきたぞ。」「たくさんでき過ぎて窮屈そう!」こんな問答が毎回続いています。子どもたちは本当に生き生きと、目をキラキラと輝かせて、大切に野菜や果物を育てています。

「大きくなったらみんなで食べようね!」「わたしはお家に持って帰ってみんなに見せてあげるんだ!」さまざまな思いを持った子どもたちは、収穫の喜びを味わうことができる日を楽しみにしています。私もそんな子どもたちの成長を毎日見守っています。実はそんな私も、畑を作ってメロンを植えました。さらに、バナナの苗を5本ほど校内に植えました。野菜や果物を育てるといことは、本当にワクワクするものですね。



マドリッドから2

マドリッド日本人学校 小吹 孝雄

たった2年半しかマドリッドに住んではいませんが、今年のマドリッドは異常気象です。マドリッドには2回の雨期があるといわれています。10月後半からと、2月です。そして4月に2、3日狂ったような天気があり、そしてとても乾いた夏に突入という感じです。

しかし、今年の天気は大変でした。20年この現地に住んでいる人も、30年住んでいる人も、初めての体験だったといいます。それは長雨です。昨年10月初旬からしとしと雨がふり、いわゆる乾期と思われる時期にも何度も雨がふったのです。逆に北欧「フィンランド」のほうでは例年になく暖かい冬を「といっても氷点下20度は普通です。」迎えたそうですが、マドリッドでは信じられないほどの「日本の雨に比べればかわいいものです。」雨にたたられたのです。そして夏がやってきました。マドリッドの夏はなんといっても日向は43度「直射日光を計るので、日本の計り方とは少し違いますが」日陰はそれは風がくるととても気持ちの良い夏なのです。しかし今年は前半は冷夏、それも太陽の国スペインをがっかりさせられるくらいの曇りの天気でした。後半は確かに熱くなり、マドリッドの夏を取り戻したかのような感じでした。ところが日陰に行ってもあまり涼しくないので、日本で経験したあの暑さです。とっても湿気があるんです。もうすぐ日本に帰るわたしとしては、慣らしには良いのですが、最後の夏を感じられないのは非常に残念でした。

しかし、この3年間でいろいろな経験ができました。また、経験するためにたくさんのお金も使いました。正直350万の借金をしてスペインに来たのですが、その借金も返せず、もちろん日本でいただいている給料もほぼ使ってしまいました。しかし、もちろん後悔はしていません。それは今しかこのスペインや各国を歩きまわることにはできないと思ったからです。変動するヨーロッパ社会、そしてたくさんの日本人がそこで頑張っている姿を知ったことはわたしにとって宝だと思っています。そして、来年1月にユーロが始まろうとしています。ある意味で世界は一つだということを知り、今日本に帰ろうとしています。

デュッセルドルフ日本人学校に赴任して

デュッセルドルフ日本人学校 志村 克己

デュッセルドルフは、世界一日本的な街と言えるでしょう。「ルールの事務机」と呼ばれ、

地理的に欧州の中心であるため日本企業は4百社以上、在留邦人も6千人を数えます。街の中心部は日本料理店が軒を並べ、日本人が行き交っています。当然日本人学校の規模も大きく、小学部は学年3学級ずつ、中学部は2学級ずつあります。

今年度、本校は様々な節目を迎えます。丁度開校30周年にあたり、あらゆる行事が「30周年記念～」となります。また離れていた中学部を小学部へ統合する事になり、校舎とのお別れ会や移転作業もありました。更には21世紀を迎え、IT教育に力を入れるとの思惑から、最先端の情報機器も整いました。PC室は2室になり、全職員に一台ずつノート型PCが配備され無線LANでつながっています。日本国内の学校でもこれだけの情報教育環境を備えているところは少ないでしょう。

また、仕事をして初めて気付いた事ですが、居ながらにして日本全国の教育実践を見ることが出来るのです。これは教師として貴重な財産となりそうです。職員会議も圧巻です。九州弁が司会をし、東京弁が提案する。関西弁がつつこみを入れ、東北弁がまとめる。茨城弁も負けてはられません。

生活面でも、日々カルチャーショックを受けています。先日は、渡独間もない私に金髪の女性が道を訪ねてきました。どう見ても黄色人種の私にです。もちろん答える事はできません。その時私は、日本の国際理解教育は考えを変えなければならないと痛感しました。今のドイツに国境はないと言っても過言ではありません。自由に隣国から人々が入り出しています。外国人などという感覚は全く無いのです。つまり国籍を考えているようでは既に遅れているのです。

逆に矛盾する事ですが、日本人なら誰もが学習し、万能と思えた英語がヨーロッパでは案外通用しないという事です。地続きだからこそ母国の言語を守ろうとするのでしょう。若い人ほどドイツ人は独語だけ、フランス人は仏語だけという人が多いように思います。

残り2年半、初心を忘れず茨城県出身の教員として恥ずかしくないよう精一杯努力すると同時に国籍を意識しない国際感覚を身につけたいと思っています。

イタリアに住んで・・・

ローマ日本人学校 尾見裕史
(2000年度派遣)

赴任二年目を迎えました。イタリアに住んだからこそ発見できた、気づいた事柄、海外日本人学校に勤務したからこそ体験できたことを、今年度は報告いたします。

【イタリア人は怠け者？】

イタリア人は昼ご飯の時間は店を閉め、家でゆっくりと過ごす。私たち日本人から考えるととても「自分勝手に、怠け者」ではないか？そう信じていました。赴任当初は、コンビニエンスストアもない、日曜日は店が閉まってしまう。なんて不便なのだろう。お客のことを考えていない。と、憤慨していたものです。

確かにイタリア人の、特に役所関係の書類手続きの遅さは我慢できないものです。でも、例えば道路を掃除する人たちは休日といえども朝7時前から歩道を掃いています。ごみ処理のトラックは、朝早くから夜遅くまでいつとなく来ては、大きなごみ箱をガガガーッとひっくり返し、ごみ収集をしていきます。パールは6時ぐらいから開き、普通の店も8時半には開きます。閉店も夜の8時です。イタリア人はよく働くのです。

昼は昼で、家族と一緒に昼食を食べるために家に帰る人たちの昼休みなのです。そのため、家路を急ぐ車やスクーターで12時過ぎは大渋滞です。これもひとえに、家族を大切にする国民性のゆえです。ゆっくりと家族との会話を楽しみながら食事することに、この上ない喜びを感じている人たちだからでしょう。

【サッカーの国イタリア、サッカーの町ローマ】



今年ローマを本拠地にするASローマがセリエAのチャンピオンになりました。シーズンが進むにつれ、ASローマの優勝の可能性が高まり、街角には応援グッズを売る露天商が立ち並ぶようになってきました。ASローマはご存知、中田英寿の所属していたチームです。控え選手ながら、その存在感は大きく、ローマの人々でも『中田』を知らない人はいません。日本人を見れば、“Nakata!”と大声をかけられ、彼のおかげでローマ在住の私たちはどれほど得な思いをしたか分かりません。

6月17日の最終戦

に優勝を決めたASローマは、激しいサポーターあつてのチームです。Giallorosso(イタリア語でローマカラーの黄色と赤を意味する)の名のとおり、街はその色で埋め尽くされました。例えば道路にマークが描かれたり、階段が2色に染め抜かれたり、あるいは道路の縁石が黄色と赤になっていたり……。穏やかな日本人には狂気沙汰としか思えないような町並みの様子です。けれども私たちもその騒ぎに便乗して、ずいぶんと楽しませてもらいました。こんな経験はもうできないかもしれないのですから。



フランクフルトに赴任して

フランクフルト日本人国際学校 飯沼 久子

ドイツ・フランクフルトに着任してから約5か月が経った。まだ多くを語れる段階ではないが、現時点でのこちらの様子を、雑感を交えながら書きつづってみようと思う。

◇フランクフルトの暮らし◇

「暑い所は大丈夫ですか。」文部省(当時)の面接でこう尋ねられたこともあり、暑い国に派遣されることを期待していた。しかし赴任国はドイツ・・・やはり寒かった。着任したばかりの4月はまだまだコートが必要。朝は吐く息が白い。さすがに7、8月には30度を越える日もあったが、朝晩は涼しい。冬の寒さを想像すると恐ろしい。

町の治安はとても良い。3月まで住んでいた常磐線K駅付近より安全に思える。数年前までは、Uバーン(地下鉄)の駅を出たら銃の音が鳴り響いていた、なんてこともあったらしいが、市当局の努力によって著しく治安が向上したということだ。

食材も思っていたよりずっと豊富にある。「ジャガイモとソーセージしかない」というのは一昔前の認識だ。トルコ人を初めとする外国人労働者の増加に伴い、他国の食材も入ってきたらしい。近所のスーパーにはしいたけも「S I I T A K E」という名で売られている。予想以上に英語が通じるのもうれしい。

◇日本人学校の様子◇

児童生徒数は250人弱。小学部9クラス、中学部3クラスからなる。日本と同じように教科の授業が展開されているが、他に英会話(小3から)とドイツ語(小1から)の授業も行われている。七夕集会や餅つき、百人一首大会など、日本的な行事が大切にされる一方、現地理解をねらいとする行事も多い。小4~6の宿泊学習が3泊4日にわたって行われ、さらに6年生は修学旅行(3泊4日)もあるというのには驚いた。とにかく行事が多い。子供たちにドイツならではの体験をさせたいという先生方の思いが反映されているのであろう。

たった5か月の経験だが、とりとめもなく書き連ねると話題は尽きない。1年経ったころには、何かまとまった報告ができるようにしたい。殊に今年度担当している自閉症児(初めての経験!)の指導に関する研修を深めることが最大の課題である。

派遣三年目を迎えて

バルセロナ日本人学校 秋場義明

茨城県海外子女教育研究会の諸先生方に壮行会を開いていただき、決意も新たに茨城をあとにしたのが、つい先日ことのように思い出されます。三年目の今年は、諸先輩方のおっしゃったとおり、月日が経つのが本当に早く感じられます。残りの約半年、次にくる先生方が働きやすい環境になるよう、引き継ぎ資料等をしっかりと残しつつ、実践を積んでいきたいと考えております。

さて今回は、ある体験を通しての「バルセロナ生活」をお伝えしたいと思います。

キーワード 語学力

昨年のクリスマスイブ、私は娘と病院の一室にいた。「お腹が痛い」という娘を連れ、救急病院に駆け込み、診察。

医者曰く「今夜はここで過ごしてくれ」。

父曰く「帰れないのか？今日はクリスマスイブだ」

再び医者曰く「だめだ、ここに泊まれ。おまえも一緒だ」

忘れられないクリスマスの夜。娘と二人不安な夜を過ごし、翌日を迎えた。

医者「急性盲腸炎だ。30分後に手術する。」

父「・・・。」

まさか異国の地でこういうやりとりをするとは。スペイン語と英語をおりませながらのやりとり。いざ、手術になったときも、麻酔担当医から病室に確認の電話があり「アレルギーはあるか？」など、直前にいくつか質問をしてきた。スペイン語で伝えられず、英語でいうと、向こうがよくわからないらしい。専門用語などわかるはずもなく、気は焦るばかり。辞書を片手に、私がスペイン語、スペイン人の医者が英語で答えるという変なやりとりも経験し、あらためて語学の必要性を感じた。ふだんの生活では「なんとかなる」ことも、こと命に関することになると話は別である。

今年の夏は、客人を三組迎え、ガイドとして「研修」を積んだ。買い物や見学地でのやりとりは、正しいスペイン語とはいえなくても、こなせるまでになった。スペイン語力はまだまだだが、ことばの「感じ」をつかむこと、いいまわしの「雰囲気」をみにつけられた気がする。話すときにも、ある意味での「余裕」ももてるようになった。

「その土地で話されていることばを話す」ことは当然であるが、なかなか勉強する暇がないのが派遣教員の実状である。しかし「なんとかならない」ときのために、どうしてもさけて通れない道である。派遣教員のみなさん、気持ちを新たに「現地のことば」を覚えましょうね（注：自戒の意味を多分に含む）。

インダスデルタのマングローブ

松本 洋一

カラチは年間を通してほとんど雨が降らないため、緑に乏しく、田畑や林、小川などに親しんだ日本とはだいぶ環境が違います。日本のような森や林はなく、人工的に植えられた木以外は背の低い灌木が土漠を這っているのしか目にすることができません。川は生活雑排水が流れ込み、あまり近づきたくないにおいがしています。

そんななか、海岸周辺の湿地帯に広がるマングローブ林（正しくは植生全体を「マングローブ」というらしい）は、カラチを含むインダスデルタ地帯最大の緑地帯です。泥湿地のため、今までは眺めているだけでしたが、ちょうどWWF（世界野生基金）の広報センターが完成し、見学のほかに植林などもできることになったので、中学1年生が理科でマングローブについて調べることになりました（私は担任としてTTのような形で参加）。

4人のこどもたちは、手に入る資料で下調べをし、興味を持った事柄についてテーマを設定したうえで、WWFを訪れました。WWFでは、ひとしきりマングローブやWWFの活動について説明を受けた後、敷地内の湿地で植林をしました。わたしなどはこどものころ田んぼに入って遊んだ経験から、泥地にはいる感触を懐かしく思いましたが、彼ら（ずっとパキスタンに暮らしている子を含む）は全く初めての体験らしく、緊張するやはしやぐやら、大騒ぎをしながらなんとか割り振られた分を植えたのでした。

この施設がある海岸は、アオウミガメの産卵で知られ、日本人学校でもよく訪れる所なのですが、帰り道はこどもたちとともに、今までとは違った視点で景色を見ることができました。

例えば、集落にはたくさんのラクダや牛、ヤギがいるのですが、それら家畜が食べているのはマングローブの葉です。小屋もマングローブらしい枝でできていました。薪らしい枝の束や炭焼き小屋に山積みの木炭もマングローブ。東南アジアのマングローブはエビの養殖池として伐採されているという話は知っていましたが、ここでは現地の人の生活になくはならないものとして消費されていたのです。何気なく通っただけでは気づかないことでした。

カラチは日本ほど情報を手に入れにくく、行動も治安上制限されるため、必ずしも教師が情報量で優れるということはありません。こんな感じで、子どもたちとともに日々新しい発見や失敗を繰り返しながら学校生活を送っています。



C a m e l

ルーマニアの日本人と日本人学校

2000年度派遣 ブカレスト日本人学校
柴田 均（原籍校 東海中学校）

「ルーマニアをご存知ですか？」で始めた前回の原稿ですが、覚えていらっしゃるでしょうか。それからルーマニアのことは少しは調べてみましたか。（まるで先生のような感じが・・・）

ルーマニアには邦人が200人くらいいます。そのほとんどが首都ブカレストにいます。地方に行っているのは、海外外協力隊のメンバーと企業の一部です。ルーマニアの日本人は、我々のような公的公務で来ている者を除くとわずかです。企業のほとんどは商社や営業所で工場を持つ企業は、ボールベアリングの大手「KOYO 精工」1社です。永住権をもつ日本人はいません。

200人足らずの日本人社会で、日本人会に所属している数が121人、57世帯になります。大使自らも名誉会長ということでいろいろな行事も参加なされます。もう、皆が家族のようです。その中で日本人学校の果たす役割は重要で、事務局は一応会長のいる企業の事務所に置いてはいるものの行事の多くは、派遣教員が中心になって企画運営をしていきます。もちろん、大使館・企業・JICA・日本人学校と4つのグループから代表を出して共同で行うのですが、文書づくりや係り分担などそこはなれた先生が、一役も二役も買います。

年度始めの行事は総会を兼ねたパーベキュー大会、会場の手配は企業の方に、会計は大使館会計班、JICAが物資の購入、残りの進行、受け付け、写真撮影等々ほかは何でも先生がやります。当日のイベントの準備、人がいなければイベントまでやっちゃいます。（ちなみ今年、バンドでした。大使館と企業からも応援がありました。）運動会、テニス大会、ソフトボール大会なども同じです。そして、日本人会最大のイベント忘年会では、呼び物の新人芸（その年日本人会に入会した人が披露します。）の中心にもなります。シナリオづくりや練習場の提供、準備、片付けなど・・・

でも、苦に感じたことはありません。子どもたちはもちろん大人まで一緒に楽しむことのでき

るルーマニア日本人会行事は最高です。その中心になって活動する日本人学校は、昔の田舎の学校のように地域コミュニティーの中心なのです。

在ルーマニアの日本人のために働いているのだという使命感に燃え、日本人学校のもう一つの役割を実感する今日この頃です。

もう一つ、最近ルーマニアも日本に知られるようになり、長くこちらに住んでいる方たちが、テレビやHPなどを使って情報を発信しているようです。今年12月5日頃NHKで「ルーマニアのジプシーを追う」と言う番組が放映される予定です。お楽しみに・・・。

(雑感)



大使とともに

あ　と　が　き

ここに、先生方に3度目の定期的な広報誌をお届けいたします。会長の細野先生を始め、海外の先生方や帰国された先生方からもたくさん原稿をいただきました。お忙しい中、原稿をいただきまして、どうもありがとうございました。この場を借りましてお礼を申し上げます。

この広報誌を編集している間に、アメリカで同時多発テロ事件が発生しました。この事件の影響で、ニューヨーク日本人学校に専門のカウンセラーが派遣されたり、パキスタンの2つの日本人学校が休校になったりと、激動の時期を迎えました。他の日本人学校でもアメリカンスクールほどではないにしろ、何らかの対応を迫られていると思います。このピンチを乗り切れることは大変なこととは思いますが、派遣されている先生方には貴重な経験になることと思います。頑張ってくださいと思います。

また、国内においても大阪教育大学附属池田小学校の殺傷事件を機に安全対策の見直しが行われております。国の内外で安全対策を再点検する時期にあるのではないかと思います。そのときにリーダーシップをとるのは、海外で安全対策に携わった帰国教員ではないかと思います。我々の使命は重要であると思います。

今回の広報誌の作成に関して、在外教育施設へ赴任されている先生方への原稿依頼には、Eメールを使用しました。ほとんどの在外教育施設でメールボックスが開設されており、とても助かりました。また、原稿を送付していただくのにもEメールを使用しました。私のメールボックスの容量が小さいので、迷惑をかけたこともあったのではないかと思います。お詫び申し上げます。写真も添付ファイルで送っていただきましたので、広報誌に掲載いたします。広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるように、今後整備していきたいと思っております。興味のある方は、ご覧下さい。

ホームページアドレス—<http://www.zenkaiken.net/~ibaragi>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと思っておりますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス(ken-kawa59@clubAA.com)(文責 河嶋)